



## 学年末に向けて

校長 緒方 直彦

寒さの厳しい日が続いておりますが、校内には子どもたちの元気な声と笑顔があふれています。

2月是一年のまとめと、次のステージへの準備を進める大切な時期です。日々の学習や生活の中で、子どもたちはそれぞれのペースで多くの「できた」「わかった」を積み重ねてきました。朝の支度を自分で行えるようになったこと、友だちに自分の気持ちを伝えようとする姿、苦手な活動にも最後まで取り組もうとする姿など、どれもが大きな成長の証です。私たち教職員は、その一つ一つの歩みを大切に受け止め、子どもたちの自己肯定感を育む支援をこれからも続けてまいります。

また、2月は学年末に向けて、進級・進学を意識する時期でもあります。不安や期待が入り混じる中で、子どもたちが安心して次の一步を踏み出せるよう、一人一人の実態に応じた丁寧な引継ぎと支援の充実を図ってまいります。

心と体の健康を第一に、笑顔で年度末を迎えられるよう、教職員一同力を合わせて取り組んでまいります。今後とも、本校の教育活動へのご理解とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

Since  1997

2月18日はあきる野学園の開校記念日です。それぞれでお祝いの気持ちをもってもらうよう、休業日(学校はお休み)としています。

## 開校30周年に向けて

副校長 畑 優佳

本校は、次年度開校30周年という節目を迎えます。あきる野の地は、古くから人々の暮らしが営まれ、信仰や交通の要所として歴史を重ねてきた地域です。多摩川・秋川の流に育まれ、山や里の自然とともに、人々は生活を築いてきました。そうした地域の歩みを支えてきた JR 五日市線も 100 周年を迎え、あきる野の歴史の重みを改めて感じさせます。時代が移り変わる中で、集落の姿や暮らしの形は変化してきましたが、人と人の結びつきを大切にしながら、地域が受け継がれてきたことは、今も変わりません。平成の大合併により現在のあきる野市が誕生してからも、この地域は、都市と自然がともにある暮らしの場として歩みを続けています。そうした長い歴史の積み重ねの中に、本校もまた、地域に支えられながらその一步を刻んできました。日頃より本校の教育活動にご理解と御協力を賜り、感謝申し上げます。

特別支援教育では、これまでも一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援を重視してきました。近年は、障害の有無にかかわらず、互いの人格と個性を尊重し合い、共に生きる共生社会の実現が求められ、学校には、子どもたちが将来、社会とつながり、自立や社会参加へと向かうための学びと支援が期待されています。

本校は、特別支援教育の専門性を基盤に、子どもたち一人ひとりが安心して学び、力を伸ばしていける教育環境の整備に取り組んできました。地域の歴史が人びとの営みによって紡がれてきたように、本校もまた、日々の教育活動の積み重ねを通して子どもたちの成長を支えてきました。

開校30年目を迎えるにあたり、29年の歩みを礎として、地域とともに子どもたちの「今」と「これから」を見据えた教育を、今後も着実に進めてまいります。



武蔵引田駅付近からの朝焼け～澄んだ空に浮かぶ太陽から1日のパワーをもらいます。

## 一人通学に向けて

生活指導部

児童・生徒の自立と社会性を育てる重要な学びとして、「一人通学」の取組を段階的に進めています。一人で安全に移動できる力は、卒業後の進路選択の幅を広げるだけでなく、日常生活の活動範囲を広げ、生活を豊かにする大切な力となります。

特に B 部門では、高等部からスクールバスの利用が原則としてできなくなることから、在学中に必要な力を身に付け、進級や進学後の生活を見通して準備することが重要になります。練習は、週 1 回の実施から少しずつ回数を増やしたり、通学経路の一部のみから始めて段階的に距離を伸ばしたりと、児童・生徒の力に合わせて無理のないペースで進めていきます。位置探索機能のある端末を携帯することで、万が一の際にも居場所の確認ができ、より安心して取り組むことができます。

一人通学を始める際には「一人通学練習申請書」を、正式に可能となった段階で「通学届」を提出いただきます。進級・進学に向けた準備が本格化するこの時期、担任と相談しながら安全に取り組みを進めていきましょう。

## 進路決定について（卒業はゴール?）

進路指導部

高等部 3 年生の進路先が徐々に決定しつつあります。

学校から社会に巣立つ本人そしてご家族にとって、卒後の日中活動場所（例えば、企業就労や障害福祉サービス事業所）が決まることは大きな目標の一つです。また、卒後「どこ」「だれ」と住まうのか? 「働く」以外の活動（例えば余暇）を決めていくことも大切な生活設計の進路決定となります。ところで、本校では進路指導の中では「18 歳（高等部卒業）は、決してゴールではない!」という事を伝えます。先に述べた高 3 時の卒後の様々な進路決定とは、一見相反するよう見えるかもしれませんが、この「18 歳の進路決定」には進路選択・決定の二つの側面があると考えています。

一つには、長い学生生活から社会生活へと巣立つ 18 歳というタイミングは、やはり生徒本人にとって大きなトピックです。ゆえにその機をとらえ、それまでの学習成果を踏まえて進路決定に主体的に関わることは、本人の人生にとって意味があるという事。

二つには、18 歳時の選択・決定はあくまでその時の決定。卒後の本人の成長や状況の変化に伴い、当然変わっていくものであり、その時の決定にずっと縛られる必要はないという事。

ただ、いずれの見方においても共通する事（大切になる事）は、生徒本人がそのプロセスにしっかり関わり、自身の考えをまとめ、周りに意思を伝え、決定を下しているという事です。できうるならば「選択肢があり、正しく比べて、自分で選べる」となるとよいです。このことができていると、たとえ一度選んだ進路を変更しなければならなくなったとしても、その変更に関わる本人が前向きに関わることができる可能性が高まると考えられます。

進路決定を考えるこの時期に、卒後につながる「選ぶ」ことの大切さ、それを在学中から丁寧に学んでいくことの大切さについてともに考えていきましょう。

